

## After

# 日本のトップ施設と同等の 高品質な内視鏡診断・治療を 温かな雰囲気の中で提供したい

34歳で内視鏡室を任せられ  
信頼に応えようと努力

同院は、腹腔鏡手術治療の第一人者である金平永二氏が院長を務め、低侵襲治療の中でも臓器温存を主軸に診療を行っている。

吉田氏はいわば同院の根幹となる内視鏡室の運営を一任され、「白いキャンバスに絵を描くように、理想の内視鏡室を作ってほしい」と言われ、驚いたと話す。

「当時34歳だった私は、金平先生から大事な部門を任せてもらい、陰ながら支えていただきました。その信頼に少しでも応えたくて、『がん治療でトップレベルの病院と同等の高品質な内視鏡検査』を、『地域に根ざした温かな雰囲気の中で提供する』ことを目標に、スタッフ一丸となってきました。成果を上げなければ金平先生に申し訳ないので、その場合は半年で辞めようと覚悟していました」

吉田氏の考える高品質とは、内視鏡による診断・治療の精密さは

もちろん、患者から見えない部分にも配慮し、安心で安全な医療を提供することだという。

「その点、当院のスタッフは非常に優秀で何をすべきかを熟知しています。患者さんの問診や状況把握など検査前に確認すべき点をつかり抑え、検査を安全に行えるようにし、検査後も安心してお帰りいただけるようできる限り注意を払っています。こうした対応もあって、『この病院の内視鏡は丁寧で安心』と口コミで広がり、当院で内視鏡検査を受ける患者数は、私が着任してから3倍近くにまで伸びました。ただ当院で重視するのは数よりも、患者さん一人ひとりといかに深く関わり、満足いただけただけかどうかです」

より低侵襲な治療であるESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）はがんを的確に内視鏡で診断し、薄い粘膜下層を剥離する高度な治療技術が求められるが、これらは吉田氏の臨床経験や大学院での研究が十分に生かせる分野。

「どんなに困難な症例も最後まであきらめずに完全にきれいに切除し、病理診断に結びつけるようにしています。今までに800人以上の方にESDを行いました。皆さまに感謝の言葉をいただき、診療の励みになっています」

チームの一体感や教育など  
転職後に心がけた3つのこと

医局を離れ、同院の内視鏡診療部長となって6年の間、3つのことを大切にできたと言います。

「まずは看護師やメディカルスタッフとの一体感。大病院ではどうしても医療の中心は医師との感じが否めませんでした。しかし当院は事務職も含め全員が『患者さんに良い医療を提供しよう』という気持ちにあふれ、その連携を生かして、各自が力を発揮できる環境づくりを心がけています」

吉田氏は院内で医療安全を含む5つのカンファレンスの責任者も務め、さまざまなスタッフと接する機会が多いのも楽しみと笑う。

「次に医師やスタッフの教育です。後進の医師に内視鏡の診断・治療に習熟してもらうことは、その人が将来診るであろう、多くの患者さんを幸せにすることにつながります。そのため出し惜しみなどせず



内視鏡室で患者に説明する吉田氏

ずに教えています。そしてカンファレンスを重視して、診断に迷うケースは必ず複数の医師の意見を聞いています。そんなやり取りが気軽にできる、オープンな雰囲気も当院らしさでしょう」

最後に医師としての厚みだけでなく、人間としての厚みも大切にしたいと吉田氏はいう。

「診療時間中は忙しいのですが、比較的早い時刻に帰宅でき、子どもと遊んだり家庭のことを手伝ったり、読書や音楽も楽しむ余裕ができました。これまで治療技術ばかりを磨いてきましたが、転職してからは人間性も十分に養い、患者さんにとって『困ったときに、頼りになる親戚』のような存在になれるだろうと思います」